空中樓閣

津村節子

村節子

空中楼閣

空中楼閣

定価 九八〇円

昭和五十七年七月二十五日 印刷
昭和五十七年八月 十 日 発行

著者 津村節子

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ッ橋／大阪市北区堂島／北九州市小倉北区紺屋町／名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 佐久間製本

検印省略

© S. TSUMURA Printed in Japan 1982

空中楼閣　目次

五年目の晩夏　7
紫色の包み　33
発光魚　63
空中楼閣　85
遺書　115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

佳日　127
ぬるま湯　151
白い喉　177
髪を洗う　199
初出一覧　221

装幀　川田幹

空中楼閣

五年目の晩夏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

園江は、先刻から左頬に視線を感じていた。

確かに誰かに見られている——。

そう思うと頬が強張ってくる。知人なら、声をかけてくるだろう。横顔では確信が持てずにためらっているのだろうか。

その方へ顔を向ければ、先方もこちらが確認出来るだろうし、園江も相手がわかるのだが、いきなり見るのも不自然である。眼が合ってばつの悪い相手でも困る。

それにしても、ずいぶん執拗な視線であった。気がついてから、もうかなり経つ。

園江はまだ経験したことはないが、友人や知人の話では、街を歩いているといつの間にか並ぶようについて来て、お急ぎですか、とか、お茶でもいかがですか、などと誘ったり、待合わせ場所で相手を待っていると、いま何時でしょうか、とか、どなたかお待ちですか、などと声をかけてくる男がいると聞いている。

男の年齢はさまざまで、学生風の若い男もいるが、中年のサラリーマン風、初老の正体不明の男もいるという。

「女なら誰でもいいのよ。ただで遊ぼうという魂胆があさましいじゃない」

そう言いながらも、男から声をかけられたことは満更でもないらしい。

園江はこの店へはいってから、かれこれ四十分ほどになることに気づいた。頼まれた洋服の附

属品を探し廻っていて疲れたので立ち寄ったのである。今年は例年にない冷夏で、レジャー産業は痛手をうけ、農作物にも影響が出ているというが、不景気風の吹く中で、幸い園江は多忙だった。買い忘れた物はないか、とメモを改めたりしているうちに、居心地がよかったので長居したようである。

待合わせでもないのに、一人でこんなにゆっくり喫茶店で時間を過したことはない。歩いている時でも気がつくと小走りになっている。

夫と一緒に暮していた時には家のことが気にかかり、家庭から離れてからは仕事のことが頭を去らず、常に気持がせいている。よくよく自分は貧乏性なのだ、と思わずにはいられない。

待合わせでもないのに、女が一人喫茶店で時間を過していると、男の眼にはつけ入る隙があるように見えるのか、と園江は不快になって席を立った。レジスターの方へ歩きながら、いつの間にか男だと決めている自分に気づいて、おかしくなった。

外は大分暮れてきていた。少しずつ日が短くなっている。これから夕食の買物をして帰るつもりだったが、荷物があるのと、なまじ休んだので疲れが出たのとで、買物をするのが億劫になった。土曜日で、一人娘の美子は学校の帰りに友達の家へ廻り、今夜は泊ることになっている。

アパートで一人きりの食事を作って食べるのもわびしい気がして、仕入れの帰りに何度か寄ったことのある、家庭的な雰囲気のシチュウの店の方へ足を向けた。少し距離はあるが、車を拾う

ほどでもない。

歩いているうちに、園江は誰かにつけられているような気がした。

今日は、どうかしている——。

園江は気のせいだと思いながらも、足を早めた。すると、後から聞えるその足音も早くなった。

少し気味が悪くなり、園江は途中の公衆電話ボックスにはいった。別に今連絡する必要はなかったのだが、足音をやり過すために客の電話番号を廻した。

ボックスの傍を、男が通り過ぎて行った。園江はその方へ背を向けるようにしながら、レースのウエディングドレスをカクテルドレスに仕立直しする仮縫の日を決めて受話器を置いた。ボックスから出たとき、男の姿は視界にはなかった。

やはり、気のせいだったのか、と園江は幾分はぐらかされたような気がした。ということは、何となく男につけられてみたいという願望がひそんでいたのだろうか——。

見知らぬ男に話しかけられたり、誘われたりするのは不快だが、男から全く無視される存在になっていると思うことも淋しいのかもしれない。

四つ角まで来た時、園江の目の前に不意に男が出て来た。園江は、その場に直立し、小さな声をあげた。それは、五年前のある日、出社したまま消息を断った夫の真紀男だった。

「驚いたわ。急に――」

園江はしかし、意外なほど平静な自分を意識した。曲り角から突然男が現われて眼前に立てば、驚くのは当然である。が、園江は五年間も消息不明だった夫との邂逅に、心を動かされてはいなかった。

「元気そうじゃないか」

真紀男は、園江の頭から爪先までを、まじまじと見つめながら言った。

「ええ、なんとかね」

園江には、真紀男が想像以上に老けたように感じられた。鬢に白髪も見えている。五年の歳月が経っているのだから、それだけ年をとっているのは当然なのだが、いくらか痩せたようで、そのせいもあるのかもしれない。

園江はこの頃若くなったとよく人に言われる。自分でも、ひところより顔に生気が戻ってきたように思うのだが、真紀男の眼には別れた時よりも老けてうつっているだろう。

「ちょっと話をしないか」

「何の話?」

園江は、皮肉で言ったわけではない。今更話すことなどなかった。

「暫くぶりだから、何かと話はあるだろう」

「私は別に――」
「怒っているのも無理はないが」
怒るなどという簡単な言葉で片づけられることではなかった。が、そんなことを言ってみる気も今はない。
「怒っているわけじゃないわ。もう昔のことですもの」
「きみのほうで話すことはなくても、僕はあるんだ」
言いながら、真紀男は園江と並んで歩き出した。
「夕めしでも食おうか」
「そうね」
園江は曖昧(あいまい)な声で言った。別れていた夫と偶然出会い、夕食を共にするなりゆきになったことに、まだ気持がついてゆききれない。
「美子にも会いたいし」
真紀男は、アパートへついてくる気なのか、と園江は驚き、
「美子はいないわよ。今日は友達の家へ泊りに行っているわ」
と言った。
「じゃあ、この辺で何か食べることにするか。以前よく来ていた店はあるんだが――」

「そんな店じゃないほうがいいわ。駅の近くにいろいろあるじゃないの」
園江も、この町へはよく来るので、何軒か知っている店があるが、正体不明と見える男と一緒にはいりたくはなかった。仕入れの帰りに一人で食事をするほか、客と待合わせたりもするが、園江の客は女に限られているのだ。

二人は、駅の近くの飲屋街を幾曲りかして、路地奥の小料理屋へはいった。
一階がカウンター式になっており、二階もあるらしい。真紀男が確めると、まだ時間が早いせいか空いているという。
狭い階段を昇ると、二階に小部屋が二つ三つあり、二人は一番奥の部屋に通った。三畳に床がついていて、座卓の両側に一人ずつ坐ればいっぱいという小部屋だ。
女中が注文を聞いて去ったあと、
「その後、どうしているかと思って」
と、真紀男は園江の顔を懐しそうに見つめながら言った。
「私たちのことを、思い出すことなんかあるんですか」
つい、皮肉っぽい口調になる。
「それはそうだよ。きみが嫌いになって別れたわけじゃない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.